

Title	ジョン・ヒックの宗教認識論
Sub Title	John Hick's epistemology of religion
Author	間瀬, 啓允(Mase, Hiromasa)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1988
Jtitle	哲學 No.87 (1988. 12) ,p.53- 68
JaLC DOI	
Abstract	John Hick considers the nature of religious experience in the fifth chapter 'The Nature of Faith' of his Faith and Knowledge. In addition Hick examines knowing, awareness, and related concepts as they pertain to the believer's epistemic relation to God. In this paper I shall bring forward the view of Hick's epistemology of religion, or more simply, religious faith as 'experiencing-as'. For Hick intends his account as an epistemological analysis of the notion of faith. Then I shall try to give some critical comments relating especially to two foci: First, the notion of faith as 'experiencing-as' and second, the question of faith and experience.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000087-0053">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000087-0053</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ジョン・ヒックの宗教認識論

間 瀬 啓 允\*

## John Hick's Epistemology of Religion

*Hiromasa Mase*

John Hick considers the nature of religious experience in the fifth chapter 'The Nature of Faith' of his *Faith and Knowledge*. In addition Hick examines *knowing*, *awareness*, and related concepts as they pertain to the believer's epistemic relation to God.

In this paper I shall bring forward the view of Hick's epistemology of religion, or more simply, religious faith as 'experiencing-as'. For Hick intends his account as an *epistemological* analysis of the notion of faith.

Then I shall try to give some critical comments relating especially to two foci: First, the notion of faith as 'experiencing-as' and second, the question of faith and experience.

---

\* 慶應義塾大学文学部教授 (哲学)

ジョン・ヒックは『信仰と知識』<sup>(1)</sup>の第2部第5章「信仰の本性」において、宗教的経験の本性を考察し、さらにその考察にもとづいた宗教認識論を展開している。そこで本稿では、その理論の展開をたどりながら、まずはヒックの宗教認識論を理解すること、次にはそれに対する若干の批判的考察をおこなうこと、を目的とする。

## 1.

人であれ、物であれ、対象の存在を意識してこれを知るようになるのは、経験によるか、推論によるか、である。神意識の場合は、一般に、経験によるといわれる。神の存在が意識されるのは、神が生きた存在として私の経験のなかに参入してくる、といわれるからである。そこで、神は経験されたリアリティとして記述されるのである。しかし、神の存在は他の対象とは独立に、あるいは無関係に、それ自体として直接に経験されるものだろうか。答えは否である。物的環境や社会的環境をぬきにして、神的なるものが直接に、それ自体として、意識されることはないだろう。というのは、一般に、人の宗教的意識においては、神は「物的環境や社会的環境のなかで、またそうした環境を通して、人と出会うものとして捉えられている」<sup>(2)</sup>からである。よく言われるように、宗教的経験とは「宗教者たちの全体的経験」<sup>(3)</sup>のことなのである。

たしかに、このことは宗教的生において例証することができる。一般に、宗教者は礼拝行為のときだけでなく、その場を離れたところでも、自分にむけられた神的要求を良心の促しによって感じるときに、神の存在を意識する。生命の神秘にふれて、神の創造のわざを意識する。友情のこもった振舞いに接したときにも、神の恵みを意識する。要するに、たとえ不完全であれ、断片的であれ、神的現臨と活動を経験するということは、一般の宗教者にとっては、この世の生活を離れてのことではなく、この世の生活のただなかで、またその生活を通して、のことなのである。言いかえ

れば、神的なものの意識は物的世界の意識に媒介されて成り立つ<sup>(4)</sup>、ということである。〈媒介されて成り立つ知識〉mediated knowledge は宗教的主張によって要請されるものではあるが、しかし、それは宗教的経験をも含んで、われわれの〈認知的経験〉cognitive experience のもつ共通の、すでに容認されている局面でもある。そこで、この認知の働らきから見るならば、神意識はどのようなものとして捉えられるのだろうか。

一般に、認知の様式には二つのものがある。一つは〈現前における認知〉cognition in presence で、これは現前する事物を認知すること——たとえば、知覚したり、見知ること——である。もう一つは〈不在における認知〉cognition in absence で、これは不在である事物を認知すること——たとえば、信念を抱くこと——である。<sup>(5)</sup> 実際的な宗教的行為——祈禱、讃歌、礼拝、説教——においては、〈見知りによる神の認知〉cognition of God by acquaintance のほうが、前提されているようである。というのは、宗教者はその宗教的生活において神と出会う、あるいは神的リアリティを経験する、といわれるからである。これに対して、神学では、信仰は〈信念〉belief として、つまり〈命題的な態度〉propositional attitude として扱われる。たとえば聖トマスの教えに依拠するキリスト教的伝統においては、信仰は神の権威にもとづき、神の啓示された真理、つまり命題的真理を信じることだとされている。したがって、信仰とは神の愛のわざに向けられる人間の信仰的応答ではなく、もっぱら神学的真理に対する人間の知的同意である、と見なされるのである。<sup>(6)</sup> しかし、信仰とは、上に述べたように、見知りによる認知の一形態、つまり〈現前における認知〉cognition in presence の一形態ではないのだろうか。というのは、16世紀の宗教改革者たちが求めたものは、実にこの形態における神の認知だったからである。つまり、信仰を〈命題的な信念〉propositional belief と解するのではなく、これを〈知覚〉perception と解する、ということだったからである。そこで、ヒックは、次のように論点を明確化して言う。

……したがって、私は、〈信仰による神の認知〉 cognition of God by faith とは 現前する何かを知覚すること、現前する物的対象を知覚すること、のほうに近いのであって、不在の対象についての言明——その言明が証明されたものであれ、またわれわれがそれを信じたいと欲するものであれ——を信じることではない、という可能性を探究したいのである。<sup>(7)</sup>

## 2.

この探究の手がかりは、ウィトゲンシュタインの〈見る〉 to see の分析に求めることができる。<sup>(8)</sup> ウィトゲンシュタインは絵パズルの帯びる意味に注意を向けたとき、一つの有益なヒントをわれわれに提示した。つまり何かを〈見る〉 to see ということは、それを何か〈として見る〉 to see as ということであって、そこにはかならず解釈がともなわれる、ということである。かれの与える例証は、ジャストロウの「うさぎ-あひるの頭」の絵である。われわれはこの絵を左向きのあひるの頭としても、また右向きのうさぎの頭としても、見ることができる (see ... as ...)。つまり、われわれはその絵のあるアスペクトを知覚するのである。そこで、ヒックは言う。

〈何かを何かとして見る〉 seeing-as についてわれわれが語るのは、網膜にうつるという意味での客観的に存在する事物が、二つの異なるあり方において、二つの異なる特性、あるいは本性、あるいは〈意味〉 significance を持つものとして意識的に知覚されうる場合である。そして、大抵これらの二次元的な事例においては、心は seeing-as の二つのあり方の間を揺れ動いているのである。<sup>(9)</sup>

ここで、ヒックが〈意味〉 significance とよんでいるものに注意しよ

う。それが meaning でなく、significance であるのは、meaning では知覚的経験の根本的な特徴を確定することができないからである。ここで〈意味〉significance とは、単なる空虚または混沌<sup>カオス</sup>の反対としての「世界」<sup>コスモス</sup>について我々の有する意識<sup>センス</sup>のことである：われわれはこの意識<sup>センス</sup>を有するがゆえに、われわれの世界はわれわれに親しみがああり、理解可能であり、またわれわれはそれの一部を感じ取るのである。<sup>(10)</sup>「われわれが自分の環境に住みつき、これと協調できるのは、この居心地のよい、親しみのもてる、理解可能な、という経験の特徴——〈意味の所有〉possession of significance——のゆえである。<sup>(11)</sup>したがって、このように使われる〈意味〉significance とは、要するに、われわれの意識が本質的に〈意味についての意識〉consciousness of significance であることを確言しているのである。<sup>(12)</sup>

〈意味〉significance と相関関係にあるものが〈解釈〉interpretation である。解釈には（真か偽かの）説明としての解釈と、（正しいか正しくないかの）認識としての解釈、の二つのものがある。<sup>(13)</sup>前者は〈なぜ〉Why? という問いに答える場合——たとえば、形而上学者によって与えられる世界についての解釈の場合——がこれに当たる。後者は〈何〉What? という問いに答える場合——たとえば、「あれは何か。犬か狐か」の問いに答える場合——がそれに当たる。しかし、〈説明〉explanation と〈認識〉recognition とは、区別はできても分離はできない。というのは、どのような説明も、究極的には認識の働きにもとづくからである。たとえば「世界全体」を問題にするような場合には、説明と認識のあいだに区別をたてることすらできなくなるだろう。というのは、世界の説明は世界の〈意味〉significance を知覚することによってのみ可能だからである。したがってこの場合、解釈は認識でもあり説明でもある、ということになる。したがって、たとえば世界についての有神論的な認識というものは〈意味の帰属〉significance-attribution であって、それは世界についての形而上学的な説明でもある、<sup>(14)</sup>ということになる。

さらに、〈意味〉significance は本質的に行動に関係する。<sup>(15)</sup> というのは、われわれにとっての対象の〈意味〉significance は、われわれがその対象に向ける我々自身の実際的な行動によって成り立つからである。また、行動というものは、いつでもある特定状況における行動のことでもあるのだから、われわれにとっての対象の〈意味〉significance は、われわれの直面する状況においての、〈状況的意味〉situational significance<sup>(16)</sup> ということにもなる。ヒックはこの状況的意味に三つの主要な領域をあげている。第一は自然、第二は人間、第三は神、の三領域である。<sup>(17)</sup> 第一の、われわれに対する物的世界の〈意味〉significance は、われわれが生存するために、その特性と法則性とを学び、これらに従わなくてはならない客観的な環境のそれである。第二の、われわれに対する人間的世界の〈意味〉significance は、われわれが道徳的義務のもとにあって責任を負う行為の主体であると思なすような人間関係領域のそれである。しかし、道徳的世界に関係することと、自然的世界に関係することとは、明瞭に区別されるものではない。道徳的世界に関わることは、自然的世界に関わることの一つの特定のしかたなのである。そして第三の領域、つまり究極的にわれわれ自身がそこにおいて神的なるものと結びつく領域、がある。しかし、その結びつきかたも、けっして第一の自然的、第二の倫理的領域を別にしておこなわれるのではない。もしそれが別のことであるならば、われわれが神に関係することはありえないだろう。

このようにして、これら三つの連続した領域において、それぞれ〈解釈〉interpretation という根本的な行為が求められ、この行為によってそれぞれの領域内の存在がわれわれに対して顕わになるのである。<sup>(18)</sup>

### 3.

ヒックは〈何かを何かとして見る〉seeing-as という考えを、ただ視覚の領域だけにとどめないで、統合的に機能する知覚の全器官によっても働

らくところの、〈何かを何かとして経験する〉 experiencing-as という考えにまで拡大する。<sup>(19)</sup>

たとえば、「バタバタ」という羽音を羽音として聞くが、しかしその同じ羽音を飛び立つ鳥の羽音としても聞くことができる。また、野原の房々とした草をウサギとして見るとか、部屋の片隅にうつる影をだれかの姿として認めることもある。こうした事例から言えることは、一つの感覚は他の感覚と無関係に作用するのではなく、協同して一つの複合的知覚としても働らく、ということである。つまり、われわれは諸感覚の協同によって、単一の複合的知覚として事物を知覚したり、認識したりする、ということである。これとの類比で言えば、われわれは自分の人生の出来事を純粹に自然的な出来事として経験することもできれば、また神の現臨と活動を媒介したものとしても経験することができる。したがって、有神論の立場でいえば、宗教的信仰とは自分の人生を神との出会いとして経験することだ、ということになる。それは、ちょうど知覚がある形のもを一匹のウサギとして見ることに等しい。ヒックにとっては、あらゆる経験 experiencing が “experiencing-as” なのである。たとえば、間違って房々とした草をウサギとして見ることも、また正確にこれを房々とした草として見ることも、共にそうなのである。<sup>(20)</sup>

通常、このような〈何かを何かとして見る〉 seeing-as は〈認識する〉 recognizing とか、〈同定する〉 identifying とか、いうふうに言われる。これはある概念を、経験された事物にあてはめることを意味する。そこで、いまこの考えに立つならば、ヒックの言うように、ある事物を経験したり認識したりすることが、諸感覚に直接与えられたものを超えた事物について言明することにもなるのである。

さらに重要なことは、〈何かを何かとして経験する〉 experiencing-as のもつ別の側面である。たとえば、空中に浮かぶ対象物を「鳥」として経験することもできれば、またそれを「鷺」として経験することもできる。

また、さらに高次のレベルで、「獲物をねらう鷲」としても経験することができる。高次のレベルの認識は、それ以前のレベルを前提しながら、しかもそれを超えていく。認識におけるこうした意識のレベルは、対象物だけでなく、状況にもあてはめることができる。ある対象、あるいはある状況を経験したり、認識したりするならば、かならずそれにともなって、その対象に対し、あるいはその状況に対して、何らかのしかたによる〈対応〉 response が示される。そこで、この〈何かを何かとして経験する〉 experiencing-as の相関物を、ヒックは〈意味〉 significance とよぶのである。<sup>(21)</sup> この場合、〈意味〉 significance は〈適正な対応〉 appropriate response をさす言葉としても使われている。

認識上に意識のレベルがあるように、〈意味のレベル〉 levels of significance もある。ある状況を単なる物的出来事のパターンとしてみれば、その状況は純粹に〈自然的/物的意味〉 natural/physical significance しか持ちえないが、しかしその同じパターンを〈倫理的/道徳的意味〉 ethical/moral significance を持つ状況としても経験することができる。また、さらに高次のレベルで、その状況を〈宗教的意味〉 religious significance を持つものとして経験することもできる。これは〈意味のオーダー〉 order of significance とヒックのよぶものであり、<sup>(22)</sup> このオーダーに則して〈適正な対応〉 appropriate response もある。

たとえば、満ち潮で岩場にとり残された釣人のことを考えてみよう。危険な状況にあることに気づいて、その釣人は助けを求めよう。道徳をぬきにすれば、これは物的出来事のある特定のパターンである。けれども、われわれは道徳的存在として、それ以上のものをそこに認知する。その物的出来事を物的出来事として経験しながら、その物的出来事を、われわれに道徳的要求をつきつけている状況としても経験する。つまり、その物的出来事のパターンを〈倫理的意味〉 ethical significance を持つものとして経験するのである。そして、その場の適正な対応は、助けの求めに応

じることだと判断されるのである。ところが、道德心を持たない人のことを考えれば、その人はその場の状況の持つ〈倫理的意味〉ethical significance に無頓着でいられるかもしれない。しかし、そういう倫理的独我論者のことは別にすれば、倫理的なものは、それが前提とする〈物的意味〉physical significance を媒介として、〈意味のオーダー〉order of significance<sup>(23)</sup> として経験されるのである。

さらに、〈宗教的意味〉religious significance は高次のレベルの〈意味〉significance であるが、それは道德的判断の次元を含みつつ、これを超えた新しい次元のものである。たとえば、預言者タイプの宗教的伝統においては、神の現臨はいつでも、何らかの道德的要求をともなっていた。預言者たちはその時代の歴史的状況を神の重大な要求のもとで生かされている状況として、またその場にふさわしく行動するように神の代行者として生かされている状況として、経験していた。かれらは歴史に働らく神を認知し、その目的が成就されていくのを見とどけていたのである。

ここに見る預言者の信仰には、認知的な宗教的経験における解釈的要素が強かうかがわれるが、実はこの点に、宗教的信仰に対するヒックの認識論的分析の要点が見出されるのである。かれにとっては、宗教的信仰は、〈何かを何かとして経験すること〉experiencing-as であり、そこには、ある状況に対する〈宗教的意味〉religious significance の経験が含まれている。その経験内容は何かといえ、それは神の行為としての出来事であり、状況なのである。つまり、人生における出来事や状況を、神の行為として、あるいは神との出会いとして経験すること (experience ... as ...) なのである。そして、これが宗教的経験における〈解釈的要素〉interpretative element といわれるものなのである。

#### 4.

宗教的信仰を“experiencing-as”と解するヒックの認識論的分析には

問題はないか。

一般に、〈A を B として見る〉 to see A as a B は B との〈見知り〉 acquaintance を前提にしている。したがって、たとえば房々とした草をウサギとして見ることができるのは、前もって「ウサギ」といわれるものを見知っていなければならない。というのは、たしかに人間の認識は最初から「解釈」を含んだかたちでおこなわれるが、しかしその「解釈」はいつでも〈見知り〉 acquaintance に依拠しているからである。もしもそうであるならば、ある出来事を神の行為として経験する——危険から脱したとか、難病がいやされたという出来事を神の行為として経験する——ためには、先に〈神の行為〉 act of God とはどのようなものであるのかが直接の見知りによって知られていなくてはならないだろう。ところが、神の行為として証言されているものは、みなこの世の出来事であり、宗教心からはそれが神の行為として見られても、懐疑心からは純粹に自然主義的に説明のつくものだと見られている。したがって、ヒックの分析には難点が残るようにも思えるのである。

これに答えて、かれは言う。

……認識の過程は神秘であるが、われわれは絶えずものを認識しているし、またさらに認識することを学ぶこともできる。われわれの認識活動は断片的なものから始まって、やがてウサギをウサギとして、フォークをフォークとして知っていく。したがって、〈神の行為〉 act of God という概念の使用も、他の概念の使用の場合と同じように、徐々に学びとられていくものなのだ。<sup>(24)</sup>

だから理論上に難点は残らない、というわけであるが、しかし、ここに新たに気づかれる問題は〈神の行為〉 act of God という表現に対する適正な言語使用の基準の問題である。この表現の使用に対して、そのような基

準はあるのだろうか。

たとえば、野原の遠方に見える対象物を「房々とした草むら」として見るか、あるいは「ウサギ」として見るか、の場合、そのどちらが正しいかについての判定の方法はある。もしもハンターが居合わせて、それをウサギとして見るならば、かれは銃をそれに向けて発砲するだろう。獲物に命中すれば、房々した毛に血のついた動物をそこに見出すだろう。仮にそれがウサギでなく、草むらだったとしても、その間違いの生じたコンテクストはそこにあつて、そのコンテクストのなかである対象物を、この場合は間違つて、「ウサギ」として見たというふうに、「ウサギ」という語の使用を学ぶのである。つまり、この場合には、間違いであつたか、なかつたか、を決定するために準拠すべき公的な基準はあつたのである。こうした基準が「神の行為」という言葉の使用にもあるのだろうか。この問いに対する答えは否である。というのは、人生の出来事を神の行為として経験する人の振舞いのなかに倫理的行為や宗教的行為が含まれていて、それなりにある種の言語使用がおこなわれていることは確かであるが、しかし、そうした出来事を神の行為であると確証する経験も、神の行為でないと反証する経験も、記述できないからである。この点がヒックの理論に見出される大きな難点である。

さらに、ヒックの“experiencing-as”の考えには二つの反論が見受けられる。第一はカイ・ニールセンのものであり、<sup>(25)</sup>第二はロイ・ペレットのものである。<sup>(26)</sup>

第一の反論は、ウィトゲンシュタインが『哲学探究』のなかで seeing-as の分析をおこなつたとき、すべての seeing が seeing-as であるとは断定しなかつた、という点に集中する。すなわち、「私には、ライオンのふつうの画像をライオンとして見ようとしたり、同様に F をかかる文字として見ようとしたりすることはできない。(ただ、たしかに、たとえばその文字を絞首台として見ようとすることはできるが——)<sup>(27)</sup>」とウィトゲン

シュタインは述べているが、また、ナイフとフォークを眺めて、「私はいまこれをナイフとフォークとして見ている」と言ったとしても、ほとんど意味がないだろう、<sup>(28)</sup>とも述べている。そこで、ウィトゲンシュタインの指摘しているあとのほうの論点にヒックはまったく気づいていない、とニールセンは批評する。もしもこの点に気づいていれば、すべての経験 *experiencing* を “*experiencing-as*” と断定するようなことはしなかっただろう、というわけである。また、*seeing-as/experiencing-as* を〈認識〉 *recognizing* と同定することにも反対する。もしも遠くに見える人物を、私が私の妻として認識するとしても、私は彼女を私の妻として見るのではなく、ただ彼女として見るだけのことだ、というわけである。“*seeing-as*” という概念は、ただ〈見る〉 *to see* ということだけを背景にして、はじめて意味をなすものだ、というわけである。

第二の、ペレットによる反論も、〈見ること〉 *seeing* が「感覚に与えられたもの」よりもさらに多くのものを含むとするヒックの主張を認めながら、だからといって、すべての *seeing* が “*seeing-as*” といえるかどうか、という点に集中する。というのは、“*seeing*” は〈信念〉 *belief* と内的に結びつくが、“*seeing-as*” はかならずしもそうではないからだ、というわけである。たとえば、ある雲をユニコーンとして見ても、だからといって空にユニコーンがいるとは信じないだろう。次の二つの文の形式——「私はあるもの X を見る」(*I see X.*) と、「私はあるもの X を Y として見る」(*I see X as Y.*)——を比べてみると、そのことが明らかだ、という。第一の文の形式による主張は、「私はあるもの X の存在を信じる」ということを含意するが、第二の文の形式による主張は、「私はあるもの X を Y であると信じる」ということを含意もしなければ、また「私は Y の存在を信じる」ということも含意しない。というのは、“*seeing-as*” は〈信じる〉 *believing* との結びつきを持っていないからだ、というわけである。

こうした反論の是非については、さらに詳細な検討が必要であろうが、

ここでは割愛する。

## 5.

これまでに述べてきたように、〈宗教的意味〉religious significance のローカスは宗教者の経験全体であるが、この〈意味〉significance を宗教者に顕わにさせるものが〈解釈〉interpretation という基本的な行為であった。ヒックはこの行為を重視して、とくにこれを〈トータルな解釈〉total interpretation とよび、次のような例をあげて説明している。

私は見知らぬ建物のなかの部屋に踏み込む。そこでは武装した戦闘的秘密結社のメンバーたちが、武力による体制打倒をめざして、血なまぐさい計画を細かく練っている。全体の状況は極度に緊迫している。……突然わたしは背後にスタジオがあり、アーク灯と静かにまわるカメラが設置されているのに気づく。偶然にも私は映画のセットのなかに踏み込んでいたのである。この認識は、私のおかれた直接的な環境についての解釈の変化において成り立つ。実は今の今まで自分のおかれた環境を現実のものとして、つまり自分が危険な状況におかれているものとして解釈していた。ところが、今や私はその状況をそれとは全く異なる〈意味〉significance を持つものとして解釈しはじめる。同一の現象がいまは全く異なる状況を構成するものとして解釈されるわけである。……しかし、今その部屋を世界にまで拡大してみよう。そうすると、この世界は我々が誕生して踏み込む見知らぬ部屋ということになる。しかし、そこにはスタジオはない。自分のおかれた状況についての〈意味〉significance を顕わにしてくれそうな手がかりを求めても、何も見つからない。そこで、われわれの解釈は〈トータルな解釈〉total interpretation でなくてはならなくなる。つまり、我々の経験する世界全体がかくかくの種類のものであり、またしかじかの方法で我々の生き方に影響を及ぼすもの

だということを、我々がそこに立って断定するような、そうした〈トータルな解釈〉 *total interpretation* でなくてはならないわけである。<sup>(30)</sup>

これは有神論者の信仰理解がどのようなものであるかを示している。神は有神論者がこの世界を生きていく経験のなかで、またその経験を通して、かれと関わる場所の見えざる人格<sup>ペルソナ</sup>なのである。有神論者は神的現臨と目的とを媒介するものとして、世界全体を解釈する。かれは自分のおかれた状況において、それに対する〈適正な対応〉 *appropriate response* は宗教的信頼と服従であるという〈意味〉 *significance* を見てとっているのである。<sup>(31)</sup>

この原初的知覚、つまり宗教的解釈という基本的行為は、宗教者の経験のなかに神的なものが現臨するということの把握である。それは一般的真理にいたる推論ではなく、〈出会い〉 *encounter* といわれるもの、つまり〈生ける神との媒介的な出会い〉 *a mediated meeting with the living God* のことなのである。<sup>(32)</sup>

しかし、ここには宗教認識論上の、重大な問いがとり残されている。それは、有神論者は自分の経験のなかで、またその経験を通じて、媒介的にあれ、神的現臨をいかにして知るのか、という問いである。ヒックはいかなる認知にも〈解きえない神秘〉 *unresolved mystery* があって、〈知る-知られるの関係〉 *the knower-known relationship* は最終的な分析において *sui generis* だとしているが、<sup>(33)</sup>しかしそれは有神論者にも説明できない——「かれ（有神論者）はただそういうふうに自分の経験を解釈しているだけのことを見出す」<sup>(34)</sup>——と述べただけでは、上の重大な問いに答えたことにはならない。有神論は知らず知らずのうちに自分の経験をそのように解釈しているのかもしれないし、またそうするように育てられたか、あるいはそうすることに何らかの満足を覚えるからかもしれない。しかし、だからといって、ヒックのいうように、そうした解釈の妥当性を正

当化するための知的責任から免れられるものでもないだろう。<sup>(35)</sup>

ヒックの宗教認識論の要点は、神の現臨が世界の経験を通して媒介的に知られる、という強い主張なのであるから、有神論が世界を経験的に解釈する一つの方法にすぎない、などと言うだけで終わってはならないだろう。事実、有神論者は自分の経験する世界を独自の方法で解釈しようと努めてきたのであり、またそのように解釈するときには、いつでもその解釈が適正なものであるのかどうかを吟味してきたのである。したがって、有神論者はなぜそのように経験を解釈するのか、解釈しつづけるのか——、なぜ有神論的な言葉で考えるのか、考えつづけるのか——、といった問いを避けて通るならば、それは理論上の難点であると厳しく批判されなくてはならないだろう。

注

- (1) John Hick, *Faith and Knowledge*, London: Macmillan, 1957, 2nd ed. 1966, 2nd ed. reissued 1988.
- (2) 同書, p. 96.
- (3) 同書, p. 96 に引用されているウィリアム・テンプルの言葉. William Temple, *Nature, Man and God* (London, 1934) p. 334.
- (4) 同書, p. 96.
- (5) John Hick, 'Religious Faith as Experiencing-As' in *Talk of God* (*Royal Institute of Philosophy Lectures*, Vol. 2, 1967/8) ed. by G. N. A. Vesey (London: Macmillan, 1968), pp. 20-21.
- (6) 同論文, p. 21. さらにジョン・ヒック『宗教の哲学』改訂版(間瀬啓允訳, 培風館, 1975年) pp. 74-75 も参照されたい.
- (7) 同論文, p. 21.
- (8) 『哲学探究』(藤本隆志訳, ウィトゲンシュタイン全集第8巻, 大修館, 1976年) pp. 383-426.
- (9) 同論文, pp. 22-23.
- (10) ウィリアム・キャピタン『宗教哲学入門』(三谷・北野・菱木共訳, 行路社, 1983年) p. 187.
- (11) *Faith and Knowledge*, 前出, p. 98.

- (12) 同書, p. 98.
- (13) 同書, pp. 101-102.
- (14) 同書, p. 102.
- (15) 同書, p. 103.
- (16) 同書, p. 107.
- (17) 同書, p. 107.
- (18) 同書, pp. 107-108.
- (19) 'Religious Faith as Experiencing-As', in *Talk of God*, 前出, p. 23. さらに、『宗教の哲学』改訂版, 前出, 邦訳 pp. 87-89 も参照されたい.
- (20) 同論文, p. 24.
- (21) 同論文, p. 28.
- (22) 同論文, p. 30.
- (23) 同論文, p. 30.
- (24) 同論文, p. 27.
- (25) Kai Nielsen, *Contemporary Critiques of Religion* (London: Macmillan, 1971), p. 86f.
- (26) Roy W. Perrett, 'John Hick on Faith: A Critique', in *International Journal for Philosophy of Religion*, 15: 57-66 (1984).
- (27) ウィトゲンシュタイン全集第8巻, 前出, 邦訳 p. 410.
- (28) 同書, 邦訳 p. 387.
- (29) *Faith and Knowledge*, 前出, p. 113f.
- (30) 同書, pp. 113-114.
- (31) 同書, pp. 114-115.
- (32) 同書, p. 115.
- (33) 同書, p. 118.
- (34) 同書, pp. 118-119.
- (35) ウィリアム・キャピタン『宗教哲学入門』, 前出, pp. 192-193.